

〈博物館研究〉

## 英国地方都市の博物館と歴史展示

外 山 徹

### はじめに

例えば、「〇〇市立歴史民俗博物館」というような名称を冠した公共の博物館を、ここでは「地域博物館」とおおまかに呼ぶが、近年、運営を第三者機関に委託する指定管理者制度の導入をめぐる論争が沸き起こったものの、大方の現場の反論を無視してその導入が進捗している。それにともなう経費削減への対処策は、経験の少ない非常勤学芸員の配置による人件費抑制に依っている傾向もあり、博物館の存在意義を過小評価しているとした言いようがないが、実際問題として、地域博物館の存在意義を現場の側から説得力ある形で関係各方面や一般社会に示すことができていないことも否定できないであろう。

歴史展示は博物館の展示として最もポピュラーなテーマであろう<sup>1)</sup>。しかし、一方で、ほとんどの館がそれを設置していると言ってもよい地域博物館の歴史展示とはいかにあるべきかという議論はあまり盛んではないような感もある<sup>2)</sup>。問題提起はなされているものの、歴史をテーマとする展示はいかに構成されるべきか、というよりは“歴史観”そのものを問う形になっているのではないだろうか<sup>3)</sup>。もちろん、歴史展示の前提として歴史観は必要である。しかし、博物館でなければ実現不能な歴史資料の提示の仕方、という点がどれほど意識されているだろうか？それは、書物の上であったり映像であったり、特段に経費のかかる博物館展示という形式をとらずとも実現可能な問題に終始してはいないだろうか？むしろ、なぜ博物館展示でなければならないのか、という点こそ訴える主眼であるべきではないか？熱心な議論に水

をさすつもりはないが、これではいくらやっても博物館自体の存在意義を世に訴えかけることにならないのではないか。その背景には、根本的な問題として、実物を収集・保管し、展示する意味についての議論がなされてこなかったという問題があるのではないだろうか。また、大方の歴史展示——特に地域博物館の常設展示に対する評価は低調である。実際、特別展の企画に比して常設展の更新はあまり熱心になされていないようにも見受けられる。これには、展示のストーリーを緻密に固めてしまったが故、複製品を多用した応用の効かない展示になってしまっている、という問題もある。

こうした問題を打開し、地域博物館の再生のため歴史展示の存在意義を議論するためには、多様な事例を検証してよりよいモデルを作ってゆくことが必要である。もとより、一朝一夕になる作業ではないが、筆者としては、比較検討にあたって、むしろ文化的なバックグラウンドの異なる事例を突き合わせることによって新しい発想があるのではないか、また、よく見慣れた日本史の歴史展示ではないからこそ、よい意味で素人の視点に立つことができるのではないかということから、本稿では近代博物館史という点で一日の長がある英国の地域博物館の歴史展示の実態についていくつかの例を紹介し<sup>4)</sup>、地域博物館の歴史展示を議論する素材の提供を試みることにしたい。

## I 英国における地域博物館の歴史展示

### 1. Colchester Castle Museum

コルチェスター市はロンドンから東北方へ特急列車で1時間半ばかり。衛星都市としては少々距離がある。エセックス州の北部に位置し、人口14万2千余、ローマ人がブリテン島に最初に上陸した地点であり、英国最古の街を標榜している<sup>5)</sup>。

博物館資料の展示は1846年に市役所の一角でスタートした。展示施設は1855年に現在地のコルチェスター城に移る。早い時期に考古学の重要資料が収集されており、1893年にはローマ時代の個人コレクションとして最良と評価されるジョスリン・コレクションが収蔵されている。1930年代の後期石器時代の遺物をはじめコルチェスター考古学協会の発掘成果によって収蔵資料は充実した<sup>6)</sup>。

コルチェスター城は1125年の完成、博物館はその天守閣にあたる立方形の建物（塔）を利用している。建物の入口は木橋を渡るようになっており、これは敵が来たら橋を引いてしまうため、元々入口を地面よりも高い位置に作っていることによる。塔の内壁は石壁がそのまま吹き抜けで天井まで届く構造である。そこに後付の床を設置して上層階をしつらえてある。入口左手にはエジプトのミイラの棺が展示されているが、これは館の展示ストーリーと直接関連しない。右手には井戸の遺構が残る。What is Archaeology? (考古学とは何か)

常設展は先史時代から始まっているが、展示室に入ったところにゴミ箱が展示してある。これは、遺跡というものの概念を分かりやすく、ちょっと意外な観点から説明しようという手法である。貝塚をはじめ考古遺跡というのは廃棄場であった事例が多く、日本でもそうした観点からの展覧会があった。

The Beginning: from Stone Age to Bronze Age

(始まり：石器時代から青銅器時代へ)

石器の展示がつづき、柄の部分で再現して石器を取り付け、手で触れられるようにしてあるコーナーもある。

「exploration point 1」と表示され、受話器があってそれを取り上げると解説が聞けるという趣向である。石斧といっても石器だけ見ているはなかなかイマジネーショ

ンがわからないので分かりやすい展示である。同様にハンズ・オン形式の土器のコーナーもあり、こうしたコーナーは意識して何箇所か設けられている。石器の次には青銅器が出て、鉄器が出て、とヨーロッパ式の時代区分がよく分かる。先史時代の最後のところには、日本で竪穴式住居が復元されているのと同様に、萱葺き掘っ立てで白土を壁に塗った住居の復元がある。

階段前のスペースに出ると、ローマの支配に対して蜂起したケルト族の女性首領として名高いボアディケアのマネキンが展示されている。彼女をテーマとした映画のスチール写真も展示されており、次の展示が始まることを示している。

The Roman Invasion (ローマ軍の侵入)

階段を上がるとローマ時代の展示である。ローマ軍の侵攻が説明され、まずは兜や剣、鎖帷子などの展示。ローマ兵士とケルト人の一対一の戦いのシーンが等身大のマネキン人形で復元されている。体験コーナーではローマ軍兵士の兜をかぶれるようになっている。これは、チェスター市のローマ遺跡の展示施設にもあったポピュラーなしかけである。また、観光イベントや博物館主催の行事などで、ゆかりの遺跡の所在地ではローマ軍の行進というイベントがよく見られる。

Boudica's Revenge (ボアディケアの復讐)

あるケースには壁面にローマ式神殿の炎上する絵画が展示してある。ボアディケアによる襲撃の様子であるが、展示されている土器類などからは焼成痕が検出され、確かにローマ人の都市が炎上したことが分かるという。体験コーナーとしてコインを拡大したレプリカに紙をあててクレヨンで上から拓本式にこするタイプのもの。ヨーク市のヨルビック・バイキング・センターにも同様のしかけがあった。

Roman Life (ローマ時代の生活)

英国にはローマ時代の城砦から発展した都市が多いが、そこではローマ時代の遺物は実に豊富であり、当館の場合もこの部門がかなりのボリュームを占める。

### The Saxon and Norman Town（サクソン時代とノルマン時代の街）

ローマの撤退（後409）の後には、サクソン時代及び英国王室の始祖であるウイリアム征服王入国後のノルマン朝時代（1066～1154）。剣や斧など武器類の金属器、ヴァイキング襲来時の展示では船の模型。マネキンによる戦いの情景復元や、兜と盾を備えた体験コーナーなどがあった。確かにマネキンを使うと雰囲気を実感した気持ちになるのだが、我が国の歴史展示を見ると、むしろ、こうした展示動向は一頃盛んであったものが否定されつつあるような感もある。

### Medieval and Tudor Colchester（中世とチューダー時代のコルチェスター）

階下に降り、先史時代の住居復元の裏手から庶民生活に関する展示として中世が続く。村の広場がイメージされた展示室には、杭の上に首と両手首を挟む枷がついている晒し刑の台がある。一面には籠に衣類が入れられ鏡が設置されている。中世人の衣装を着られるコーナーであるが、これまで随所に触れてきたようなハンズ・オン型展示の導入は近年の展示室の改良による<sup>7)</sup>。展示物としては、取っ手のついた水瓶や壺など低火度焼成の陶製生活用具、鍛造製の大きな釘、金属器にはベルトのバックル、鍵、拍車などがある。先に進むと羊の毛を刈る道具。使っている様子の絵が表示されていて分かりやすい。市場を再現したコーナーがあり、さらに進むと、木の扉に赤いペンキで「×」が書かれている。キャプションのタイトルは「The Black Death」。ペスト患者発生の家を封鎖したサインである。黒いタールで防水した木の柱

を表に出した白壁のチューダー様式（16世紀）の建築物の内部が展示してあるが、これは本物の建物の一部を移設している。

### The Stuarts and the Siege of Colchester（スチュワート朝時代とコルチェスター市攻囲）

次の部屋からは17世紀のスチュワート朝時代に移り、庶民の食生活の展示では、台所を部分的に再現して食器などが置いてあり、説明の書かれた壁の小さなフタを上にはね上げると中にその料理があるという仕掛けがあった。簡単な仕掛けであるが、まず、説明を読んで想像をしてから答えを出す、という思考のプロセスが考慮されている。その奥の常設展示動線の最後には、ライフルを抱えて座り込むマネキンが目につく。キャプションには「Civil War」とあり、17世紀後半の清教徒革命時代における内戦がテーマである。チャールズ I 世を奉じる王党軍の拠点であったコルチェスターはクロムウェルらの議会軍によって長期の攻撃に遭った。

### The Castle Prisons（監獄）

スチュワート朝時代の展示から脇に入ったところには、独立する形で刑罰関係の展示がある。元々塔内に設けられていた牢獄がそのまま展示として活用されている。ケースの壁には市内の刑罰関係史跡の所在マップが掲げられ、手枷、指枷、刑務官の鉄兜や鎧が展示されていた。イラスト入りで刑罰を紹介するパネルもあった。

### 小括

市内には同じ財団が運営する自然史博物館、生活資料と玩具を扱うホーリーツリー博物館、そして時計博物館



① マネキンによる情景復元（コルチェスター）



② 中世・陶器の展示（コルチェスター）

がある。したがって、コルチェスター城博物館は歴史展示の専門館として、先史時代～中世の埋蔵文化財を中心とする展示をおこなう館という位置付けとなる。生活資料としてはチューダー朝（1485～1603）までがほぼ守備範囲となり、スチュアート朝期の17世紀は「内戦」が主要テーマであった。

展示施設についてコメントしてみると、同館の展示室は正方形に近い大部屋を板壁で仕切っており、動線は迷路（と言っても一筆書きで本来の迷路ではないが…）のようで通路は狭い。一時に大勢の来館者があった場合は混雑が必至であるが、歴史展示で狭い動線というのは、体感イメージという点でそれなりに効果がある。

大部屋に仕切りもなく各展示ケースをならべ、弥生式土器の向こうに近世の帆掛け舟が見えるという環境では、ガラスケースに入った資料を歴史資料として見ることはできても、擬似的なものとは言え、その時代の雰囲気にはひたる気分にはならず、来館者の動機付けとして重要な要素を欠落させている感がある。また、文中でも触れたが、体感という点でマネキンの展示は有効であるが、これは我が国ではあまり流行らなくなった手法である。

当館の場合、牢獄のような元々備わっていた施設も含め、中世古城という建築物をうまく利用し、ハンズ・オンをはじめ体感を重視した博物館としてよく出来ているという評価ができるだろう。

## 2. Ipswich Museum

イプスウィッチ市はサフォーク州の南端に位置する人口12万9千の都市である。東海岸から長く切れ込んだ入り江の奥に位置し、コルチェスター市のすぐ北隣となる。両市の博物館は、立地する州が異なるが、実は同じ財団に運営が委託されている。

イプスウィッチの博物館は、1846年12月に労働者階級を対象とする自然史教育を目的に設立された。設立時の資金援助者は教育に深い関心を持つ英国国教会の牧師ビショップ・スタンリーであった。オーウェン・スタンリーの父である。19世紀までは自然史展示が中心であったが、1880・1881年に1846年建設のダンスホールであった現在の建物に移転、大幅に拡張され、アートギャラリーが設置された（後、分離）。1908年にはイーストアングリア先史考古学協会が設立されたが、博物館はその拠点

の一つとなり、当地における考古学研究が進展を見せた。その後、野鳥の剥製、西オーストラリアの民族資料などが20世紀初頭までにコレクションに加わった。戦間期から第2次大戦後にかけて考古学展示の充実が顕著になる<sup>8)</sup>。

### The Victorian Natural History Gallery

ダンスホールであっただけに建物中央に上階部分が吹き抜けとなった大きな部屋があり、キリンやサイに鹿など大型動物の剥製や骨格標本がひしめくように並ぶ展示室がある。この展示室の壁には鳥類やウサギなどの小動物の剥製が展示され、クマ、キツネ、イノシシなど、地域の野生動物の剥製もジオラマ形式で展示されている。展示室の名称（19世紀のヴィクトリア朝時代）からもわかる通り、当館の自然史展示は開館以来の伝統を持つが、動物園など地方では望むべくもない時代の展示を感じさせる。

### 通史展示

自然史展示室は上階（当地の表示ではFirst Floorであるが実際には2階部分）部分までの吹き抜けであるが、上階部分の壁際には口の字形に回廊が設置されている。回廊の壁に展示ケースが取り付けられており、時計回りに編年順で地域の歴史を紹介する構成となっている。狭い通路の壁面に後付けのケースであるから奥行きはなく、したがって展示物は小型のものばかりとなり、復元絵画や地図、解説文が多く配置されている。歴史図鑑のページ構成のような印象である。先史時代から始まり、ローマ、サクソン、中世、近代と続く。ケースごとに猫のキャラクターに吹き出しをつけたパネルが入ってお



③イプスウィッチの通史展示

り、子ども向けに易しく解説をしている。印象的なのはヘンリー 8 世の側近として権勢をふるった当地出身のトーマス・ウルジー卿に関して言及した部分であるが、これは、英国の地域博物館では出身地だからと言って著名人を取り上げる事例があまり多くないからである。

#### Romans in Suffolk

英国の地域博物館の展示としてはおなじみと言ってもよいが、やはり遺物として多く発掘されるのであろう。ここでは工房風の建物を再現して、作業の様子をマネキンで表現している。壁の棚には土器が並ぶ。

#### Anglo-Saxon Gallery

ローマ人が去った後の時代の考古遺物であるが、他館において手薄な展示がかなりの充実度と言える。墓地遺跡に関連してマネキンで戦死者の埋葬の様子が再現されており、副葬品の剣や矛など。そして、土器。原始機の復元。英国を代表する古代歴史遺物であるサットン・フーの兜（大英博物館蔵）が発見された土地柄でもあり、サクソン時代の展示の充実の背景には当地の考古学研究の発展が考えられる。

#### Ipswich at War

空襲下の生活などがテーマであるが、実物大に復元されてマネキンを配置したカマボコ型のシェルター、余暇の過ごし方や衣類、不発弾やガスマスクに土嚢を積んで機関銃を構えている実物大の再現展示。

歴史としては以上。以下、それ以外の展示構成であるが、Mankind Gallery は民族学展示といった表現が分かりやすい。アフリカその他の民俗衣装や道具類が展示してある。Geology = 地学は鉱物や植物化石の展示。British Bird の鳥類の剥製はコレクションの来歴上、G 階の展示室とは分かれているのかも知れない。Mammal Gallery = 哺乳類ギャラリーにはアザラシの剥製など。アザラシの生存を脅かす廃棄物の問題がハンズ・オン形式の展示となっている。一番奥には Egyptology としてミイラの棺やマスクの展示があった。コルチェスターでは棺が 1 点であったが、大英博物館ばかりではなく、英国各地でエジプト関係の遺物が博物館に収蔵されている。それぞれの地域に収集家があり、集めたものが収蔵されたのであろう。これ以外に 100 平米にも満たない空間であるが、企画展示室がある。

#### 小括

市内には同じ財団が運営する博物館・美術館として、クライストチャーチ・マンションという 16 世紀の邸宅がある。室内には展示を意図して歴史的な家具が配置され、時代区分別に室内の様子が再現されている。また、トーマス・ゲインズボロをはじめとする絵画、陶磁器も展示されている。一時期、博物館に設置された美術部門はこちらに移っている。

当館の特徴は、歴史展示について言えば、通史展示とは別にまとまった遺物が残存する時代を独立したギャラリーとして構成しているという点である。ギャラリーはローマ時代・サクソン時代と第二次大戦下であり、先史時代及びノルマン朝時代（1066～1154）以降、ヴィクトリア朝（1837～1901）時代までは手薄と言える。ロンドン、ヨーク市やウインチェスター市、ストーク市など、各地で見られる 19 世紀の商店移築再現展示はない。通史展示の存在が他館とは異なった印象となっているが、通史展示に付加してテーマ展示があるのではなく、あらかじめまとまったコレクションとして存在したテーマ展示を補う形で通史展示が設けられたと言える。

### 3. Winchester City Museum

ウインチェスター市は英国西南部に位置するハンプシャー州の小都市で、人口は 9 万 6 千余である。「…chester」という名からも類推されるように、ローマ人が築いた城塞から発展した都市である。9 世紀後半にはアルフレッド大王がウェセックス王国の首都に定めた場所で、当時、アングロサクソン七王国の中でも最大規模



④充実したサクソン時代の展示（イプスウィッチ）

の王国の首都ということから英国最古の都と宣伝されている。

1847年に私設館として創立。考古資料として最初の収蔵は、同年10月に発掘されたローマ時代の遺物であった。1851年に市営に移管し現在の名称となった。1903年には現在の建物が完成。ロンドン以外では数少ない博物館のために建設された建物である。1947年、初めて専門家としての学芸員が着任。それを契機に展示は考古を中心とする歴史展示に一新された。1903年から最上階を占拠していた自然史展示は撤去された<sup>9)</sup>。

展示はG階から2階まで、年代ごとにフロアを分けて構成されている。

#### VENTA BELGARUM

各フロアにはその時代の当地の呼び名が付けられている。すなわちローマ時代の当地の名称がこれである。展示室の中央にローマン・モザイクの床が展示され、周囲を壁ケースが取り巻いている。入り口左から時計回り動線となる導入部分の解説はいちおう石器時代から始まっている。ローマ時代の遺物展示は、まず「交易」「家屋」「食物」がテーマとなっており、パン焼き窯の復元模型がある。建築物を装飾した彫像、建築部材、タイル類、ローマの遺物としてはポピュラーな「墓誌」、それに関わる埋葬や宗教関係の解説がある。

#### WINTANCEASTER

下階に降りると、今度はローマ人撤退後のサクソン時代の展示である。導入部の解説にあるドイツ西部、ネーデルラント地方からの矢印で示されたアングロサクソン人の移動は各地の博物館展示でおなじみの地図である。



⑤ローマンモザイクの床（ウインチェスター）

中世遺物の展示としてポピュラーな金属器、土器類の展示となる。この部屋には古い衣類を再現したものが置いてあり、着用して記念撮影ができるようになっている。

G階に降りる階段の踊り場には「18世紀」というタイトルの解説パネルでスチュアート朝時代（1603～1714）の状況が説明されていた。すなわち、G階のジョージ朝以降の展示との間隙を埋める措置である。

#### WINTON

時代は一気に下りジョージ朝時代の後期からヴィクトリア朝時代（18～19世紀）である。壁面の解説パネルはかなりの字数をかけてその時代の特性を説明している。このフロアは薬屋、煙草屋、雑貨屋という三つの店舗の移設再現で構成されている。時代的に、あるいは地域的にこれらの店舗が特徴的なものかはよく分からない。いずれにしてもこの時代の展示はこうした実物大の店舗や室内の復元ジオラマが用いられるケースが目立つ。床面積に比して移築部分の面積が大きく、通路は商店街の道路程にもなく狭隘な感じが強い。上階と同様に衣装が設置され、クイズのシートもあり、小規模館であるが当地としてはスタンダードな教育的配慮がなされている。

#### 小括

展示は三テーマ。「ローマ」「サクソン」「近代」と非常にシンプルで、それぞれの時代における当地の呼称が展示室の名前になっているのが印象的である。ノルマン朝～スチュアート朝時代は文字による説明のみで、立体物の展示は全く割愛されているが、つまり、埋蔵文化財及び建築・民俗資料というコレクション本位の構成と言



⑥店舗の展示（ウインチェスター）



える。

ハンズ・オン型の装置やワーク・シートなど、教育的配慮として揃えるべきものは少ないながらもあるという、ここはその最小限の事例であったが、はるかに上回る運営予算をもつと思われる我が国の地域博物館においては何の配慮もないということも多い。これには博物館の来客層の相違というのはあるが、博物館が家庭教育の場であるという認識の有無は、日英両国で象徴的な相違なのかもしれない。

#### 4. Museum of Oxford

ロンドンから西北方へ特急列車で1時間余。オックスフォード市はオックスフォードシャー州の中心で、人口11万5千余、言わずと知れた学園都市である。それだけに、展示内容も大学との関わりが一つの特徴となる。

展示の冒頭はヨーロッパ大陸からのアングロサクソン民族の移動。ローマ時代の展示がないのがかえって珍しい印象である。ここでの展示の中心は土器で、焼成窯の模型が大きく目立つ。通路の幅は2mにも満たない狭隘な強制動線である。つづいてノルマン朝時代。黒い金属製の拍車が目に入るが、「鍛冶」と「織物」が展示の中心となっている。中世に入ると陶器や建材が目立ってくる。日本の考古～中世の展示と同様に、まだ地域的な特性が素人目にはあまりよく分からない時代である。

つづいて、オックスフォード大学に関わる最初の展示。「THE FIRST COLLEDGE (最初の大学)」「TOWN AND GOWN (町とガウン)」「UNEASIER BEDFELLOES (油断ならぬ仲間)」というのは学生と市民の緊張関係を意味している。次の「REFORMATION (再興)」から中世の展示の続きとなり、異端審問による火刑の絵、陶器、皮革製品（サンダル）、金工品（鋏・鎌）などが展示されている。「NEW BUILDING, NEW COMFORT」は建物の内部の一部や食膳を再現、チューダー朝時代の食器がならび、匂いの体験コーナーがある。パンやアップルパイなどがあって、要するにこの時代から普及し始めた食品ということである。

つづいて、「RISE OF COLLEDGE (大学の勃興)」と、再び大学がテーマとなり、活版印刷用の活字や学生の衣装が展示される。その間に「THE CIVIL WAR」。当地は清教徒革命期に王党派の有力な拠点であった。時代は

スチュワート朝時代に入っているが、大学関係の比重が高まり中途にそれ以外の歴史事象が挿入される形となる。「ARTS AND SCIENCE IN CLASSICAL OXFORD」は、数点の絵画と理化学の実験器具や医療関係の器具類。大学自体が壮大なスケールであることを考えると展示は象徴的なものと言ってよい。「GOOD LIVING AND A LITTLE LEARNING (快適な生活と少ない学び) — THE 18 CENTURY UNIVERSITY」というのは皮肉なタイトルであるが、学生の勉強部屋が再現され、気だるそうに椅子にもたれる学生のマネキンが展示されている。

次は「THE PACE OF CHANGE QUICKENS (急激な変化)」。時代は19世紀以降—近代に入る。最初の「THE AGE OF IMPROVEMENT (開発の時代)」は、鉄道など運輸機関の発達と道・橋の建設など。「EATING & LIVING (食住)」は生活がテーマの展示であるが、暖炉でローストビーフを作る装置や学校の教室が再現してある。情景復元には少々狭隘な展示室なので、教室の再現と言っても机・椅子と生徒のマネキンの組み合わせはわずか一組。このように狭隘なスペースにまで等身大の情景復元をしようという意図には特別な執着が感じられる。台所とピアノを置いた部屋の再現も畳三畳・四畳半ほどといった印象。布地屋のカウンターは本物を移設したもののようである。瓶詰・缶詰のパッケージ、住居表示のスチールパネルなども展示されている。

ここには、「Gallery Interactives」というコーナーがあり、19世紀当時の衣装を着用できるコーナーがある。他館にもよく見られる体験コーナーであるが、他に子ども向けの参考図書の棚もあった。展示室には随所に作業用のテーブルが設けられ、文房具が備え付けられており、ミュージアム・ショップで購入した教材を使う場所とのことである。「Brass Rubbish Bag」という、銅製の銘版を用いて拓本の原理で写し絵を作る体験コーナーも何箇所か設置されていた。

「HIGH DAY AND HOLIDAY」は庶民向け娯楽の発達に関する展示。「THE MOTOR INDUSTRY IN OXFORD」はオースチン・ローバー社の工場内の小さな模型。比較的近い過去の地場産業の展示である。

## 小括

市庁舎の脇の小さな博物館かと思ったら、展示総延長距離はかなり長い。フロアに壁面で強制動線を組んでおり、まるで迷路のようなレイアウトだった。展示のコンセプトは当地の歴史を一巡体感するというもので、歴史系地域博物館の普遍的なパターンに大学関係の展示が随所に付加されているといったところ。通史として細かい叙述を意図するがゆえに、全体的に写真と説明のパネルが目立った。また、17世紀以降は、早回しの感はまぬがれないが、情景復元など経費をかけた展示となっていた。同じ経費をかけるにも、精巧な複製品よりもマネキンやジオラマ模型が重視されているのは面白い感覚である。取り上げる素材は断片的であるが各時代を象徴するものが選定されている。なお、当館は展示ガイドというものがなく、オックスフォード市の歴史を記した小冊子がショップで売られていた。展示ガイドにはなっていないが、展示内容にはかなり忠実な構成であった。

## 5. The Grosvenor Museum Chester

チェシャー州の都市チェスターは人口8万余。英国西北の都市リバプール市の南方に位置し、ウェールズ地方に近い。西暦79年にローマ人の砦が築かれたことがルーツである。中世には港湾都市として栄えるが、港湾機能は北方のマージー河河口のリバプールに移り、現在はチューダー様式の黒い見せ柱に白壁の街として、観光を主とする地方都市である。

グロブナー博物館は1886年の創立。チャールズ・キングズリーが1871年にチェスター自然科学協会を設立して標本収集をおこなった。1873年にはチェスター考古学協会、科学芸術学校の三者が博物館建設資金調達のために合同。ウエストミンスター伯から援助を得て、当初から教室や図書室を備えた教育型の博物館が開館した。館の名称はウエストミンスター伯グロブナー家の家名に由来する。1955年からは別館の室内情景復元型の展示施設の整備が始まった。1990年に大々的な新装がなされ当地の名産である銀器の展示室も設置されている<sup>10)</sup>。

市の成り立ちに深く関わっているが故、ここもまたローマ色が濃い。エントランス・ホールにはローマ軍兵士のマネキンが来館者を出迎えている。

## Newstead Roman History Gallery

かつての学芸員の名が冠せられた展示室の出土遺物は武器や装身具、食器、建物の建材など。街並のジオラマや家屋の様子が模型で再現されている。

## Graham Webster Roman Stones Gallery

ローマの展示はもう一室あって、こちらは石造物専門の展示室である。石碑や墓碑がかなりの数展示してあり、むしろこちらが中心のかつ特徴的なコレクションと言えるかもしれない。一面には家屋の再現もある。先のニューステッド・ギャラリーと合わせると、後述の別館の室内再現展示は別にして、ローマ時代の展示が当館で最大のスペースを占めることになる。しかし、歴史展示と呼べるものはローマで終わり。中世以降しばらくの展示はない。

上階に上がると、創立以来の二本柱の内の一つである自然史の展示室 Kingsley Natural History Gallery である。鳥獣の剥製、蝶をはじめとする昆虫の標本など、キングズリーによるコレクションを中心とする展示。隣の部屋は近年新設された銀器の部屋 Ridgeway Chester Silver Gallery。銀器の向かいには絵画の展示室 Art Gallery であるが、著名な画家の作品ではなく、当地を描いた絵画が中心であり、それ自体が歴史資料として活用できそうである。廊下を進むと King's Arms Kitchen という、元の市庁舎にあった応接室が移設してある。

## PERIOD HOUSE

別館として、街区の反対側に位置する建物へ通路が連結されており、「キャッスル・ストリート20番地」と表示される三層の建物の中に、17世紀以来、各時代の部屋



⑦ローマ時代の墓誌展示（チェスター）

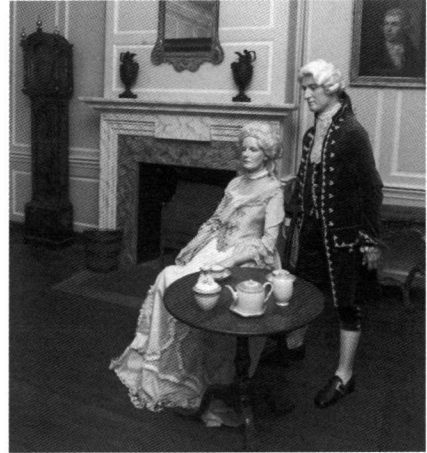


の様子を再現しているエリアがある。強いて言えば、ローマ時代以後の歴史展示としては、アートギャラリーの展示が18世紀の絵画史料とも看做され、ここが近代の生活史展示ということになる。

一室ごとに衣装をつけたマネキンが配置され、家具や道具類、服飾なども展示している、いわゆる集合展示である。ヴィクトリア朝時代（19世紀）のキッチン。18世紀ジョージ朝時代の居間。間に衣裳展示の部屋をはさんで、17世紀スチュアート朝のダイニングは板張り。20世紀初頭の浴室と洗面所、ヴィクトリア朝時代の寝室。同じく子供部屋。上流家庭のものとは言え、これは住空間についての生活史展示という評価ができるかも知れない。また、日本で言うところの民具資料にあたるものも収蔵されており、学校団体向けの教育プログラムに活用されているようである。

#### 小括

歴史展示という観点からすると、ローマ時代の考古遺物と、18世紀以降の居住空間の様子ということに限定される。実物展示とは別に市の歴史を紹介する映像コーナーがある。展示の構成全体としては、これに創館当初の自然史標本の展示が加わるというシンプルなものであった。この博物館もまた、コレクター、資金援助者と



⑧室内情景復元（チェスター）

いう、資料収集や博物館建設に情熱を持ち、理解を示す篤志家らによる建設という来歴を持っている。地方の名士や資産家が教育に関心を持つという背景が地域博物館発展には必要なのかも知れない。

博物館教育の関連では、単色刷りの質素なものであるが、ローマ遺物をはじめ各展示室に対応するワーク・シートが一通り取り揃えられていた。また、受付ではA5判横綴のカラー印刷のワーク・ブックも販売されており、この人口規模の都市の博物館としては出色であろう。リーフレットには Living Museum と謳われており、教育プログラムに力を入れていることを示している。

## II 英国における「地域博物館」の概念について

### 1. 地名を冠した博物館の問題

さて、五つの博物館の展示を通して、地方博物館の歴史展示の傾向をまとめる前に、英国における地域博物館の概念上、触れておきたいことがある。

英国の地方都市には、その都市の名を冠した博物館がたいい存在すると言ってよい。ところで、その土地の名を冠した博物館として世界最大級の事例に「大英博物館」がある。英語表記は British Museum。直訳すれば「英国博物館」である。ところが、その展示内容は周知の通り、一部に英国古代の展示もなくはないが、その中心は古代エジプト・中近東、ギリシャ・ローマの遺物というのが衆目の一致するところであろう。すなわち、この館名の意味は「英国に関する」博物館ではなく、「英国に

ある」博物館とでも理解すべきものである。よく、上記の遺物が中心なのに、何ゆえ British Museum という名称なのかと疑問を呈する声があるが、この問題は実は大英博物館に限った話ではない。

リバプール世界博物館（World Museum of Liverpool）は、2005年の新規開館までは Museum of Liverpool という名称で呼ばれていた。館名が変わったのは展示内容が変わったからではない。内実は、むしろ、館名を展示内容に合わせたと言ってもよい。当館の展示は、恐竜をはじめとする自然史展示、エジプト、中近東、ギリシャ等の考古遺物、宇宙科学によって構成されており、その意味では、ロンドンにある大英博物館と自然史博物館を足してスケールを小さくしたような博物館である。当初のリバプール博物館という名称は、まさに、ブリ

ティッシュ博物館と同じ考えと言ってよい。これは偶然のことではない。英国第3位の人口を擁する工業都市マンチェスターにも Manchester Museum がある。その展示構成は、やはりリバプール世界博物館と同様である。マンチェスター博物館は、現在、マンチェスター大学が運営しているが、設立当初からそうだったわけではない。

マンチェスター、リバプールの両館に共通して言えることは、裕福な商人や工場経営者による自然史や考古遺物の個人コレクションがあり、また、富裕者による資金提供によって収蔵・展示施設が整備され、地域の自然史協会や考古学協会がその運営に関与するという来歴を辿ってきたことである。それぞれ、1835年、1853年という英国にとっては“よき時代”に基礎が固められ、100年を超える歳月の中、今日の体制が形成されている。両館の主要な収蔵資料がローカルな埋蔵文化財に限定されず、豊富なエジプト・コレクションなどを所蔵することについては、大都市であったがゆえに19世紀における富裕な商工業者の個人コレクションを所有するようになったという説明ができるだろう。なお、マンチェスター博物館は運営を引き継いだマンチェスター大学によってエジプト研究が進捗している。

リバプール世界博物館は国立館であり、マンチェスター博物館は大学が運営しており、我が国における市町村立博物館とは運営形態が異なるが、はたしてこれらは「地域博物館」という概念から外れるべきものであろうか？やはり、これらも地域博物館の一類型と捉えるべきであろう。英国においても各地に存在する、その地域の自然や歴史を主要テーマとする、一見、我が国の地域博物館と同様に看做される展示構成は、その意味では、結果としてそうになっているという見方をすることもできよう。

## 2. 我が国の地域博物館との比較

最終的には日英両国の比較検討というものが必要であろうが、それはまた途方もない作業であり。ここでは、とりあえず管見の素材からの印象を述べることにする。

今日の我が国における地域博物館と言うと、その典型的な構成は、その地域の埋蔵文化財による考古展示、前近代の農具や生活用具などの民具展示を基本に、古文書及び実物資料による歴史展示、また、少し規模の大きな

ところでは動植物標本による自然史展示や美術展示が加わる、というイメージであろう。1970年代以降、新設が相次いだ我が国の地域博物館<sup>11)</sup>においては、ある程度、上記のようなスタンダードとも言える展示構成が設立構想としてあり、館の規模に応じて多少の異同が生じたと見ることができる。

コレクションの形成過程については各館様々であろうが、特筆されることは、複製による展示品（レプリカ）が多用されているという点である。これは、展示叙述がまず考案されて、次に、それに合わせた展示品収集がなされるという順番があるからと言ってよいのではない。一方、近代博物館発祥の地と言われ、長い歴史を持つ英国においては、最初から手本とする展示構成のスタンダードが存在するわけではなく、その来歴は自然発生的とも評価でき、地域博物館としての本質を検討する素材が得られるのではないかと考えられる。

コレクションの形成と施設建設に一定の方向性があることは度々指摘する通りである。イプスウィッチやオックスフォードのように通史展示を試みた館もあるが、どちらかと言うと、ウインチェスターやチェスターのようにまずコレクションありき。通史的な叙述としては展示上ブランクが多くあるという館は珍しくない。他にいくつか事例を補足して展示構成を比較した一覧表を末尾に掲載するが、我が国とは正反対に、コレクションがまずあってそれを基に展示叙述を組み立てるとというのが当地のスタイルのようである。したがって、実物の無いところで複製品がスペースを埋めるといったような展示はあまりない。

また、日英の相違として印象に残ったのは、支配関係の問題である。我が国の歴史展示においては、古代からすでに律令国家との関係が意識され、中世・近世と領主の存在感が大きい。しかし、当地の展示は王朝の交代や領主支配との関連はほとんど触れられていない。また、地元出身の有名人に関する展示も全く稀である。イプスウィッチのトーマス・ウルジーの展示などは例外的であるように、まずは生活の視点が展示の基礎となっている感が強い。その意味では、いわゆる日本的には「歴史展示」と言うところが、むしろ実態は「民具展示」であるという理解が妥当なのかも知れない。我が国の「歴史

展示」とは、地域の歴史に関する展示として、英国とはまた異なった考え方に基づいて形成されてきたと考えることもできよう。何れにしろ、ここでは日英どちらの展示が歴史展示として妥当かを論じるつもりはないが、展示資料の選択という点では、実物資料を用いることによる教育の実現という観点から別途詳細に論じる必要を記しておきたい。

## お わ り に

ローマ時代のモザイク装飾と墓誌、サクソン時代の鍛造金工品、ヴィクトリア朝時代の移設店舗と生活資料、というのは、ロンドン市立博物館を含め、当地の地域博物館の歴史展示にポピュラーな内容である。全般の傾向として、小規模館においては資料が少ない時代の展示は割愛されている、というのが印象である。《考古展示》で古代～中世をカバーし、年代推移もある程度意識しつつ《民俗展示》で近世後期～近代初頭をカバーするというのが基本にあるようである。これは、実物資料の残存状況がそのまま反映されているという言い方もできるし、実物資料は豊富な我が国の地方の零細館を想起させる展示構成でもある。我が国の歴史展示のように複製品を多用したり、古文書によって展示を構成することは稀である。

度々述べるように、本稿は、英国における地域博物館の展示内容を提示し、我が国における歴史展示の手本にすべきと主張するものではない。教育普及活動については別の問題として、今日の英国における地域博物館の歴史展示こそ理想的なものだとはとても言えないだろう。しかし、新しく物事を考えるには比較検討というものが必要であり、その点、我が国の地域博物館の歴史展示というのは、建設の来歴上止むを得ないこととして、あらかじめモデルケースとして示された歴史叙述に沿って作られた展示が多いがゆえに、比較検討の素材として明確な差異が出て分かりやすいものではないと考えられるのである。その点、事情の異なる英国の地域博物館の事例を提示して、いささかなりとも比較の素材とできればと考えた次第である。

地域博物館の歴史展示に関する検証は、英国に較べれば歴史が浅いとは言えその数は遥かにしのぐものであ

り、一朝一夕になるものではない。冒頭に述べたような地域博物館の再生に向け、ひとまずその来歴を検証しつつ、社会的な認知を得られる場として今後どのようなあり方を目指すか、微力ながら議論の場に加わってゆこうと思う。

写真①～⑦は著者の撮影。⑧はグロブナー・ミュージアムから提供を受けました。①～④はコルチェスター及びイプスウィッチ・ミュージアムサービスから、⑦⑧はグロブナー・ミュージアムから掲載の承認を得ています。

## 註

- 1) 日本博物館協会の統計によると、「歴史」博物館の数は1842館と館種別で突出した数値である。歴史展示を含むと考えられる「総合」「郷土」を合わせると、約62%の比率となる。数字は『博物館研究』44-4（日本博物館協会、2009）による。
- 2) 明治大学博物館学研究会等の主催により「日本の地域博物館シンポジウム」が、2003年11月15日以来、2009年度まで合計7回開催されている。博物館の現場で業務に従事している現役の学芸員を報告者に招いて開催されているが、同じ現場従事者の参加が低調な感はぬぐえない。しかし、このような試みを将来に向けて積み重ね、成果報告を継続することが肝要と考える。各回の成果は『MUSEOLOGIST 明治大学学芸員養成課程年報』に収録されている。
- 3) 例えば、国立歴史民俗博物館編『歴博フォーラム 歴史系博物館の現在・未来 歴史展示とは何か』（株式会社アム・プロモーション2003）は、歴史展示を題材とした数少ない専門書として意欲的な試みである。本書は歴史観のみならず、来館者動向などに注意が払われており、研究者の視点と中学生の視点のギャップなどについて触れられるなど示唆的である。博物館は歴史を専門的に学ぼうという意欲を持つ層のみを対象としているわけではないので、あえて歴史観とは別の次元で展示論を試みるのも一案ではないかという感想を抱いた。なお、本書は2002年11月12日に開催された第41回歴博フォーラム「歴史系博物館の現在・未来」の成果刊行物である。
- 4) 以下、展示の紹介については、チェスター市グロブナー博物館の2004年8月以外は2008年8月時点の訪問による。なお、当地の歴史展示について言及したものに、小島道裕『イギリスの博物館でー博物館教育の現場ー』（国立歴史民俗博物館2000）がある。
- 5) 都市の概況については、株式会社メディアファクトリー訳『ロンリープラネットガイドブック英国第5版』（Lonely Planet Publications, 2003）による。
- 6) COLCHESTER CASTLE MUSEUM SOUVENIER GUIDE, Colchester Borough Council, 1997

- 7) 長期的な入館者低落に対する対応策として劇的な効果をもたらした改装（もちろん、改善は展示だけではないが）については、当館の元教育員ルウェラ・セルフリッジ氏の報告を聞く機会があった。（日本ミュージアムマネジメント学会制度問題研究部会研究会、2003年10月13日）

8) イプスウィッチ・ミュージアムの来歴については Wikipedia の記事「Ipswich Museum」に拠った。

9) Winchester Museum Service, A SOUVENIR GUIDE TO
- THE CITY FROM ITS BEGINNINGS TO THE PRESENT DAY, Winchester City Council, 1997

10) THE GROSVENOR MUSEUM Chester Souvenir Guide

11) 戦後における地域博物館の展開については、前掲註（1）シンポジウムの第4回で取り上げられ、その報告内容は『MUSEOLOGIST 2006年度明治大学学芸員養成課程年報』（明治大学学芸員養成課程2007）に収録されている。

展示構成比較表

都市名	歴 史 展 示							自然史展示	絵画展示	エジプト遺物
	先史考古	ローマ時代	サクソン時代	11―16 C 考古	18―19 C 民俗	室内復元展示	現代展示			
コルチェスター	○	○	○	○	①			②		△1
イプスウィッチ		○	○			③	④	○	③	○
ウインチェスター		○	○		○					
オックスフォード	△2		○	○	○	△3	⑤			
チェスター		○				○		○	○	
(参考)										
ヨーク		⑥	⑥		⑦	⑦			⑧	
リバプール					⑨	⑨		⑩	⑪	⑩

①ホーリーツリー博物館 ②自然史博物館 △1（1点のみ） ③クライストチャーチ・マンション  
④戦時下の展示のみ △2（部分的） △3（部分的） ⑤娯楽と自動車産業のみ  
⑥ヨーク博物館 ⑦ヨーク・キャッスル博物館 ⑧ヨーク・アートギャラリー  
⑨リバプール・ライフ博物館 ⑩リバプール世界博物館 ⑪ウォーカー美術館

# British Provincial Municipal Museums and Historical-themed Exhibits

TOYAMA, Toru

In recent years, regional museums in Japan have significantly scaled back their personnel and operation. However, there have not been enough debates on historical-themed exhibits, the principle feature of these museums. The *raison d'être* of such exhibits has been undervalued and there have not been enough rebuttals. The revival of regional museums and the sustainment of debates over the *raison d'être* of historical-themed exhibits are dependent on creating better models through examinations of diverse case studies. New ideas are likely to come from comparative studies of cases associated with different culture backgrounds. Moreover, exhibits of themes other than the familiar ones about Japanese history could provide fresh viewpoints. To provide material for the debates over historical-themed exhibits at regional museums, this paper presents case studies of historical-themed exhibits held by the local museums at five British provincial cities of Colchester, Ipswich, Winchester, Oxford, and Chester, each with a population of around 100,000.